

介護職の専門家に成りたいか 暮らしに寄り添う人に成りたいか

「喜怒哀楽」は「極上のリハビリ」

介護施設職員の大切な〈作法〉の一つに、「支えとは何か」「理解者とは何か」を考え、利用者に対してできるだけうなずき、笑うことが挙げられています。

介護施設職員と施設利用者とのコミュニケーションの3Vは、



太田 宣承 氏

社会福祉法人光寿会理事長
特別養護老人ホーム光寿苑総合施設長
真宗大谷派碧祥寺住職

①ビジュアル（表情や目の動きなど）

②ボイス（声のトーンや語尾など）

③バーバル（言葉の内容など）の順と言われています。

主人公は利用者（当施設では「お年寄り」と呼びます）です。施設は「その人らしさを大切」にし、「一人ひとりの個性や特技をいかす場所（施設）」でありたいと思います。

お年寄りの「喜怒哀楽」は「極上のリハビリ」です。心の動き、感情の動きが最上のリハビリとなります。

その人が求めていること、暮らしに寄り添うことが何よりも大切です。

です。

専門職の常識は、世間の非常識という言葉もありますが、「話すより聴く、そして共有すること」「少しでもその人のよき理解者になつていくこと」が大切です。

一人十色の個別ケア

講演では、その後、「一人十色の個別ケア」「時間の使い方は、そのまま命の使い方」家さ帰る！という事と向き合つて」などのほか、「真のリスクマネジメント」「脱管理介護」や「平等感と公平感」などについても述べました。

また、看取りについては、「その人らしさが出る処」とし、人の死に際し、その生き方、逝き方に関わり、それらを肯定し、受け取り、心に留めて置くことと述べました。



福祉人材養成機関等 連絡会議を開催

福祉人材の 確保に向けて



福祉人材の確保は重要な課題になっていきます。本県では、福祉人材養成校、県保健福祉部、県高齢者福祉施設協議会、県社会福祉協議会が連携・協働し、福祉人材の育成・確保に力を入れています。

今回はその中から、「福祉人材養成機関連絡会議」と「ほいくしカフェ」の2つの取り組みを紹介します。

未来ある 岩手の介護のために

21世紀委員会委員長

中目幸晴氏

（社会福祉法人つくし会
常務理事・施設長

交流・情報交換では、まず生徒の皆さんに現場職員の生の声を聞いて頂き、介護環境に対する誤解を払拭してもらい、やりがいのある仕事と確信したうえで、今後の目標設定の一助にして頂ければと考えています。

レクリエーション・ゲームづくりでは、お年寄りに寄り添い、創意工夫を凝らした作品が多いことに驚きました。

参加した介護福祉学科の皆さんは、志のある、岩手の福祉力を高めてくれる生徒であると実感しました。

生徒の将来目標設定 の一助に

盛岡医療福祉専門学校
介護福祉学科教員

長谷川江利子氏

生徒達は目標と志をもって学んでいます。21世紀委員会の皆さんとの交流を通じて、一層、介護福祉に対する魅力と責任を感じたようです。

将来の目標設定の一助になったと思います。

事前質問にも丁寧に応じて頂き、生徒は沢山のアドバイスを受けました。

寄り添う 介護福祉士に

同介護福祉学科2年

大和司さん

利用者の方を一番に考える介護福祉士になりたい。寄り添い、やさしい変化にも気付き、できるだけ気持ちを理解できる介護士を目指したい。

介護福祉の イメージを高める

盛岡医療福祉専門学校
介護福祉学科2年

津志田真依さん

もっと若い人たちが、しっかりと高齢社会と介護力に対する知識と認識を持つて欲しいと思っています。

現場職員の方々との交流を通して、介護に対するイメージが格段に広がりました。

介護士は 素晴らしい仕事

同介護福祉学科2年

前川亮さん

東日本大震災から5年数か月が経過しますが、介護福祉士を目指したのは震災後です。

母が介護福祉士として震災直後から施設利用者や避難所で困っている人たちに手を差し伸べ、その姿に影響を受けました。素晴らしい仕事と思って学んでいます。

ほいくしカフェ開催



保育士活動再開のきっかけに

思いを新たに

8月22日、ふれあいランド岩手で、ほいくしカフェが開催されました。

ほいくしカフェは、保育士の資格を有し、現在、保育園で働いていない方々の、職場復帰のきっかけづくりを目的に開催され、13名が参加しました。

当日は、ほいくしカフェ開催の経緯の説明につづき、コーディネーター、アドバイザー（保育士・保育所支援センターを通して再就職した保育士2名）、参加者の順で自己紹

介が行われ、この中で、ほいくしカフェに参加しようと思ったきっかけなども話されました。

参加者は、喫茶店にいるような雰囲気の中で、「仕事への復帰を考えているが、ブランクがあり自信がない」「実務経験が少ない」など、再就職について心配なことや、不安に思っていることなどを打ち明け、アドバイザーからの助言に熱心に耳を傾けていました。

閉会予定時刻が過ぎても参加者の話はずきずき、保育士への復帰に向けて、思いを新たにしていました。



活発な意見を交わす

8月3日、ふれあいランド岩手で、福祉人材養成機関連絡会議が開催されました。

同連絡会議には、県内の高等学校、専門学校、短期大学、大学の

福祉人材養成校12校と、県保健福祉部3課（室）、県社会福祉協議会福祉人材研修部が参加しています。今回は、県高齢者福祉施設協議会、県介護福祉士養成施設協議会との情報交換会も併せて開催し、施設福祉人材の養成・確保を図るため、活発な意見が交わされました。

福祉人材養成校からは、「福祉・介護の生徒数が減少している」、「学生が介護施設に就職するにも保護者の意見が大きいように感じる」、「経済的に厳しい状況に置かれている学生が増え、修学資金貸

付制度を利用する学生が増加している」ことなどが報告されました。

また、「介護職の社会的認知度をあげる必要がある」、「県外に就職する卒業生が多く、地元定着が課題である」ことなども話され、「学生だけでなく、保護者に福祉への関心を持ってもらうことが大切であり、県や県教育委員会といった関係機関が連携して取り組むことが必要」との意見が出されました。

様々な関係機関と連携・協働

県高齢者福祉施設協議会からは

「高齢者は増加しており、介護人材不足は深刻」「施設では学生の就職を望んでいるが、人手不足の現場では即戦力が必要」「介護職の社会的必要性認識のためには、関係者の協議だけでなく、国の施策（仕組みづくり）が必要」などの意見が出されました。

現状だけでなく、将来的にも福祉・介護人材の養成・確保は大きな課題であることから、福祉人材養成機関等連絡会議では、様々な関係機関との一層の連携・協働を目指しことを確認しました。